

1. 海外生活における安全対策の基本的心構え

(1) 自分と家族の安全は自分達全員で守る

日本は他の国と比べて治安事情が良いとされていますが、海外では国、地域によっては治安が悪く、更に頼るべき治安機関も日本的感覚から言えばその信頼性に問題が指摘されている場合もあります。そのような状況の中では何よりも、自分と家族の安全は自分たち全員で守るとの強い心構えが極めて大切です。

(2) 予防が最良の危機管理

事件、事故、災害などに巻き込まれないように、予防することこそが最高かつ最重要の危機管理であることを肝に銘じ、予防のために必要な努力と経費は惜しんではいけません。家族、社員全員が怪我もなく、無事に帰国できればその安全のための経費は最も価値ある投資です。

(3) 悲観的に準備し、楽観的に行動する

使い古された言葉かもしれませんが、「備えあれば憂いなし」です。常に最悪の事態を想定し、物心両面から準備を行い、万全の対策を講じた上で、日々の生活を注意しながらも楽観的に生活することが重要です。

(4) 安全の為の三原則の順守

安全の為の三原則とは「目立たない」、「行動を予知されない」、「用心を怠らない」のことで、これは至極当然のように思えますが、この三原則を守って生活することはそう簡単なことではありません。日本での行動形態、生活様式をそのまま海外に持ち込むと、本人が意識しているか否かに関わり無く目立ってしまい、自らを危険に曝すことになる場合もあります。

- ①目立たない：必要以上に華美な服装、装飾品をつける、現地ではあまり見かけないような目立つ車に乗る、公共の場（レストラン、バーなど）で大きな声で現地の悪口を言う、政治、宗教、文化、習慣、生活環境などの批判をすることは、目立つばかりでなく狙われる原因にもなるので、差し控えます。犯罪者やテロリストは、標的を選ぶ際にまずは目立つ人物に目を付ける傾向があります。
- ②行動を予知されない：行動のパターン化（通勤、通学、買物、娯楽、外食の際の移動ルートや時間などの固定化）は犯罪者、テロリストなどに攻撃計画を立てやすくしますので、移動の際のルートや時間を含めなるべく不規則な行動をし、予測されにくくします。犯罪者にとり行動がパターン化した人は一番狙いやすいのです。
- ③用心を怠らない：現地に到着した当初は安全に気を配っていても、何箇月か、何年か現地で生活し慣れが生じてくると、当初注意していた諸点を忘れがちになり、思わぬ被害に遭うことがあります。また、現地の治安状況は予期せぬことが原因で大きく変化することもありますので、家族全員、会社全体で気持ちを引き締める機会を定期的に持つことが必要です。

(5) 住宅面の安全確保

住宅は生活の基盤であり、その安全を確保することは安全対策の中でも最優先事項です。住居の安全対策が確保されなければ、仕事に打ち込むこともできず、日常生活にも悪影響を与える結果となりかねません。従って、住居の選択には十分過ぎるくらいの検討時間を費やし、可能な限りの費用をかけることが必要です。

(6) 現地社会に溶け込む

普段より、隣人、コミュニティ、在留邦人等と付き合い、良好な関係を築き上げるように努め、様々な個人や組織との間でネットワーク作りを心掛けます。そうすれば、いざというときに隣人の助けも得られますし、自然と様々な情報が入ってきます。待っているだけでは情報は入ってきません。現地コミュニティ、隣人などの「口コミ」情報は、事柄の内容、また地域によっては、極めて貴重な要素を含んでいることもあります。ですから、円滑なコミュニケーションを図るためにも赴任前には、簡単な内容の本でも良いですから、少なくとも赴任する国の歴史、宗教、文化、習慣、政治、言語などに関する本に目を通し最低限の知識（特に非常の際必要な単語、短文）を得ておきます。

(7) 精神衛生と健康管理に留意

生活環境や習慣の大きく異なる海外での生活は、長期間に亘る緊張を余儀なくされる場合も多く、精神面、肉体型の自己管理が重要です。体調に異変を感じたり、精神的に不安を覚えたりした場合は、手遅れにならないよう早め早めに必要なチェックを受けましょう。

2. 住宅選択

(1) 事前チェック

住宅を選ぶ時には、安全確保を最重要点とし、他人任せにせず、自分で物件〔立地条件、家屋の形態（集合住宅か独立家屋か）、防犯上の問題点〕を調査し、安易に妥協しないで選ぶことが大事です。

滞在国（地）の政治・経済情勢、治安情勢、宗教、文化、習慣、対日感情などに関して自分なりに知識を得る努力をすると同時に、前任者、関係者からブリーフィングを十分受けることは、現地の脅威の把握、居住場所の選択などをする上で大変重要です。

自分と家族を守るために必要な情報は多岐にわたりますが、身の危険に直ちに關係する情報の主な例を挙げれば、

①滞在国内における脅威の対象（形態、種類）

一般犯罪については各犯罪に共通する教訓・注意事項、テロ・ゲリラの脅威がある場合には、それら過激派グループの性質・活動状況など、

②最近発生している治安関連事件の概要と教訓、

③日本人や日本企業、外国人などに対する事件例・教訓、

④治安機関や消防、医療機関などの能力・信頼性、

⑤現地人（ガードマン、運転手、メイドなど）を雇用する必要性があるか否か、ある場合にはその信頼度、

⑥外国人にとって危険であると考えられる都市部及び郊外の特定地域、事件がよく発生する時間帯、

- ⑦公共交通機関を使用する時や、車を運転する時の注意点、
 - ⑧滞在国の法律、文化、習慣、宗教などに照らし、禁止或いは避けるべきこと（例えば公共の場での飲酒）、
 - ⑨その他安全対策を講じる上でその国で特に注意すべき事項、
- などに関する情報収集が必要となります。

【注：各国の一般的な治安情勢については外務省の海外邦人安全課海外安全相談センター、テロ関連情報については邦人テロ対策室で情報提供を行っています。また現地の大使館、総領事館も同様の情報提供を行っています。】

滞在国の治安機関の能力と信頼性を正確に把握することは、事件の防止対策を立てる時にも、万一事件に巻き込まれた時の対処方針を立てる上でも重要なポイントとなります。また、警備会社の信頼性を把握することは、自宅などの警備体制を計画する時必要です。

この種の情報については、現地新聞などの公開情報に加え、現地の大使館、また現地の邦人社会、長く住んでいる日本人の方、現地の信頼できる取引先の関係者などから入手することができます。

住居を選ぶ時、現地の在留邦人や大使館の助言を受けることは、候補地域の安全性、防犯上の留意点などに関する情報を入手する上でも大変参考となります。滞在国（地）に関する各種の情報を収集し、脅威を把握した上で、考え得る危険を分析し、それに応じて住宅の安全対策基準を定めます。

住居を選ぶ時、まず市街地の地図を入手し、危険地帯、在留邦人の分布状況、警察署、病院、消防署、勤務場所、学校、スーパーマーケットなどの所在地、住居からそれぞれの場所に行くルートなどにつき図上研究を行うことが必要です。また、住宅業者の信頼性も調査しておく必要

があります。地域によっては信頼できる業者がない場合もありますので、自分の住居は自分の立てた基準に合わせ自分自身の目で確かめてから決定します。

(2) ルートの安全確保

上で述べたことと若干重複しますが、常に最悪の状況(事故、一般犯罪、誘拐等)を想定した上でその対策を考えつつ、警察署、病院などの場所を把握し、日常の交通経路と手段を定めます。例えば、住宅自体の環境がいくら良くても、危険地帯を通らなければ事務所や学校などに行くことができない場所であれば、そこを住居にすることは避けるべきです。

自宅から毎日通う場所(勤務先、学校、商店など)への安全なルートを2本以上確保しておくことは、行動を一定化させないために是非とも必要です。利用ルートも道幅が狭かったり、一方通行である場合、攻撃(強盗、誘拐など)され易く、また、攻撃を受けた際、逃げ道がなくなり危険です。利用ルートに避難場所(警察署など)があれば尾行等などの何らかの異変を感じたとき、危険を回避することができます。

(3) 地域の安全確保

住宅周辺の環境、治安情勢、住宅の周辺地域の住民の安全に対する関心度(他人の動勢に必要以上に無関心でないか、相互に協力可能か、防火、防犯に気を使っているかなど)についても調査します。

緊急事件はいつ起きるかわかりません。いざという時に、警察、消防、医療、救急機関などが短時間で利用できるかチェックします。スラム街や問題地域が住居の近辺にあり、そこから住居に容易に近付くことができる場所は、防犯上問題があります。また、近所に空き家や空き地など、

犯人が隠れられる様な場所がないか確かめておきます。自宅周辺に庭や、窓などを一望できるような場所があると、家の中の様子、家人の動向を知られ易く危険です。

反政府ゲリラ・過激派が活動している地域では、これらの組織の行動パターンを考えて（例えば軍・治安関係機関への爆弾攻撃が多い）、もし住居の近くに攻撃対象となり得る施設があれば、巻き込まれて被害に遭う危険があることに留意する必要があります。

(4) 住宅の安全確保

独立家屋を選ぶ場合、安全対策の面から言えば家の四方のうち、三方は別の住居に囲まれていることが望ましいと言えます。例えば、隣や裏が空き地や公園である場合、犯人はそこから暗闇に紛れて住居に忍びこむこともできますし、家の中の様子を窺うこともできます。

良き隣人に巡り合うことは、海外での生活を楽しく過ごすだけでなく、安全対策の面からも極めて重要です。家族ぐるみの交際、コミュニティのボランティア活動への参加などを通じ隣人との信頼関係を築き上げることは大切ですが、その為にも隣人の家族構成、人柄などについて事前に知識を得ておけば役に立ちます。但し、転入、転出が頻繁な集合住宅などでは、身元が不確かな住民が居住する場合がありますので完全に気を許すのは得策ではないことも少なくありません。

住居への出入り（特に車の出し入れ）については、安全にかつスムーズに行える構造になっていない場合（例えば、ガレージに車を入れる時、一旦車を降りなければならない構造）、出入りに時間がかかっている間に襲われる可能性があります。

犯人が侵入しようとする場合、各々の住居の安全対策を比較し、最も

侵入し易い家を選びます。従って、周辺の住居と比べて安全対策が不十分である場合（例えば、周囲の家が塀の上に有刺鉄線を付けたり、窓に鉄棒を入れているのに、自分の家は入れていない）、犯人の格好の標的となります。

また、住居を借りる場合、家主が安全対策に積極的であるか否かは重要です。そうでない場合は、こちらが必要とする安全対策上の設備を設置することを受け入れず、入居後のみならず、引越しの時にトラブルが生じる可能性がありますので注意が必要です。

3. 3つの防衛線による住居の安全対策

(1) 独立家屋の第1次防衛線の安全対策

(イ) 外塀

独立家屋では、外塀が第1次防衛線となります。ここは最初の防衛線であり、犯人が簡単に侵入できないような構造にします。外塀が容易に破壊されたり、よじ登ることが出来ないように、コンクリート、ブロック、レンガなどの堅牢なものにし、高さは高いほど良く、治安の悪い地域では2.5m以上（その他の地域でも2m以上）あることが望まれます。また、周囲に犯人が侵入するのに利用できる個所（樹木、電柱など）や、外塀から屋根や2階に忍び込むのに利用できる個所（例えば、外塀周辺や庭に樹木があるか否か）についても注意しなければなりません。

外塀の上に防犯灯があれば、犯人は他人に発見されることを恐れ、心理的にも侵入をすることをためらうので、防犯灯を設置することは

極めて有効です。外周に照明の届かない暗がりがあると、犯人がそこに潜み、侵入する危険があります。また、照明設備があれば住居の中から周囲を見渡すことができます。

外塀の高さが十分でない場合（場合によっては十分であったとしても）、塀の上に障害物（忍び返し、有刺鉄線、ガラスの破片など）を設置すると、もっと侵入しにくくなります。外塀を高くすることにより、住居の防御力は高まりますが、同時に、住居内部より周囲の状況が見えにくくなります。テレビ監視装置、侵入警戒装置などを設置すれば住居内部より周囲の住居を確認することができます。また、外塀は、外部より覗かれないような構造が望ましく、例えば鉄柵の塀のように外から中が見えるような塀は避けるべきです。

(D) 門扉

門扉（正門、通用門）は、第1次防衛線として外塀と同様重要です。同時に外塀と同じ位に堅牢でかつ外塀と調和（高さ、堅牢性）したものでなくてはなりません。いくら外塀が強固でも門扉が弱くては何にもなりません。門扉には南京錠のようなものは避け、しっかりした鍵を付け、必要であれば二重に鍵を付けます。

門扉には来訪者と外の様子を確認する手段として、インターフォンやテレビ監視装置等が必要です。

外周のうち特に門扉近辺は、犯人が潜んでいないか否かを確認するために必ず照明設備を設けます。

更に、警備員を配置することにより、このような物理的な警備対策を一層効果的にすることが期待できます。但し、警備員を配置するときには、信頼できる警備員を確保し、勤務要領や不測の事態発生時の対処要領などをしっかり指導しておきます。夜間には、30分毎に目覚

ましが鳴るような巡回時計を利用して居眠り防止などの措置を講じておくことが望まれます。

(ハ) 駐車場（車庫）

駐車場は住居を選ぶ時極めて重要な要素の1つとなります。強盗、誘拐などが多く発生する危険度の高い地域では、一番狙われ易いのは出勤や帰宅時の車の出し入れ（乗降）時です。まず、駐車場は住居の敷地内にあり、部外者が簡単に入れない構造になっている必要があります。外に駐車場がある場合、車に細工（爆発物の設置など）されたり、盗まれる可能性もあり大変危険です。また、車の出し入れが迅速に安全に行えなければなりません。一般的に駐車場の出入口は通常の間扉と同一のものになっていることが多いですが、可能であれば歩行者用と車両用が区別されているものが良いと言えます。車庫のドアの開閉時に攻撃を受ける可能性を少なくするためにも、車から降りないで操作出来るリモコン式自動開閉装置付きのものが望ましいでしょう。

また、駐車場内に犯人が潜めるような場所がないか確認して下さい。その為にも駐車場内は常に安全を確認出来るよう整理整頓に心掛けて下さい。外周、間扉と同様駐車場内と外にも防犯灯として照明設備が不可欠となります。

(ニ) 庭

庭と建物外周に照明設備を設け、庭に犯人が身を潜め易い暗がりを作らないことが大事です。室内には外を照射できる強力な懐中電灯を常備しておきます。また、庭の植え込みや樹木、背の高い雑草などは犯人の隠れ蓑になるので、日頃より良く整備し、室内から庭全体に不審者がいないか不審物がないか見渡せるようにしておくことが大切です。2階や屋根などへの犯人の侵入の助けとなるような足場（例えば、

塀、ガレージの屋根、高い樹木など)の有無についても注意し、梯子などを放置してはいけません。

(2) 集合住宅の第1次防衛線の安全対策

(イ) 建物共通の出入口（玄関ロビー）

集合住宅では第1次防衛線として出入口（玄関、通用門、駐車場）での防衛が極めて重要です。建物の出入口はビル側によりしっかり管理され、住居者以外の者が勝手に出入り出来ないような構造になっているか、正面玄関だけでなく裏口なども管理人または守衛によりしっかり管理されているか注意します。不特定多数の不審者が自由に出入りできる構造であれば、犯人に簡単に自宅の扉（第2次防衛線）まで到達されてしまいます。建物の出入口全てに頑丈な鍵が設置され、その都度居住者が鍵を使用して出入りする、また、テレビ監視装置付きインターフォンが設置され、建物への出入りは居住者がその都度確認し、鍵を開けるようなシステムが一番理想的です。

出入口周辺に犯人が潜むような場所があると、居住者が出入りする時に滑り込まれる危険性があります。出入口周辺には夜間の訪問者や、周囲の状況を確認するためにも防犯灯が必要です。

不審者に建物内に滑り込まれないためにも来訪者の確認はインターフォンやテレビ監視装置で行われるようになっていることが大事です。夜間は人目が少なくなり、その分犯人は活動し易く、夜間の出入口の管理は更に重要になります。

守衛やテレビ監視装置、居住者を識別するためのカード読み取り機などの管理が不十分であると、守衛が犯人に加担したり、機械が破壊されたり、細工される可能性がありますので、その人柄や機械の設置

状況などを細かく注意して下さい。住んでいる人が多くなればなるほど、部外者のチェックは難しくなります。集合住宅を選ぶ時は、犯人の侵入を少しでも防ぐため3階以上の建物で、かつ、世帯数もそう多くはなく、ある程度上の階を選ぶことが望ましいでしょう。但し、高層住宅の高い階に住むと、火事などの災害時に避難することが困難になる、現地の消防活動が到達し得ないなどの支障が出ることも念頭に置く必要があります。

(D) 駐車場

部外者が容易に入れない構造になっていることが、独立家屋の場合と同じく大切です。駐車場の出入口についても、リモコンによる自動開閉、または守衛が開閉している所を選びます。駐車場は24時間体制で管理人や守衛により管理されていることが望ましいです。24時間体制になっていても、夜間の管理がおざなりになっているようでは、駐車場内から車が盗まれたり、爆発物などを設置される危険がありますので、入居後は念のため管理状況をチェックします。駐車場内外に犯人が身を潜められるような場所がないか注意し、そのような場所を作らないよう心掛けます。

(H) 建物

緊急時の警報装置が設置されているか（設置場所を含む）、作動するようになっているか、更には緊急時に安全にかつ迅速に退避出来るよう、防火設備や非常階段があるか否か確認しておきます。そのような設備の無い建物への入居は避けるべきです。

また、内外の照明設備が充実していて犯人が隠れるような場所がないかチェックします。火災が起きた時、消防車の妨げになるような物が周辺にないか、消防活動が十分行えるか、また、地域によっては、

耐震性の強度についてもチェックする必要があります。

(3) 独立家屋と集合住宅の第2次防衛線の安全対策

(イ) 入口扉（玄関）

玄関の扉と扉の枠は頑丈なものとし、スチール製、金属製が最良で、木製である場合は簡単に破られない一枚板で厚さ5cm以上が望ましいでしょう。ベニヤの合板など脆弱な扉は、頑丈なものに交換します。扉にはしっかりした錠前を2つ以上付け、扉を開けないで来訪者を確認出来るように覗き穴、テレビ監視装置付きインターフォンを設置します。扉の周囲（近く）に窓や穴（郵便受けなども）がある場合、そこから手や道具を使いドアを開けられる危険があります。扉の周辺には来訪者をドアの内部から確認できるよう照明設備が必要です。更にセンサーなどの侵入警戒装置があれば一層効果的です。

(ロ) その他の出入口

通用門などの家屋への出入口についても、玄関と同じ位の安全対策が必要です。

(ハ) 窓

犯人にとって格好の侵入経路は窓です。従って、出入口同様の警備対策が必要となります。窓、窓枠とも頑丈でなければ、鉄格子で補強しても枠ごと破壊されてしまいます。犯人は屋根（屋上）、2階の窓、テラス・階段付近の窓から侵入するケースが多いので、犯人の侵入するときに利用し得る全ての窓（トイレの小窓、冷暖房器具の取付け口などを含め）には鉄格子を付けます（特に独立家屋の場合）。鉄格子を取り付けることにより住居への侵入は困難となり、同時に犯人の侵入の意志を妨げることができます。鉄格子は一般的に内部に取り付け

た方が警備対策上効果的です。取り付け場所が外部であっても、内部であっても、頑丈な構造と素材のものとし、簡単に押し曲げられたり、切断されない強度のもので、取り付け部分がはずされない強度であることが重要です。

なお、火災などの発生を考え、鉄格子に内部より開閉出来る部分（脱出口）を作っておくことが望めます。

万一の事態を想定し、窓にセンサーなど侵入警戒装置を設置することも有効です。

(二) 建物

建物の構造は鉄筋コンクリート製のものがよく、木造などで強度が充分でないものは補強します。床下、屋根、屋上や、集合住宅の場合、隣家のテラス、非常階段からの犯人の侵入は盲点となりやすいので十分注意して下さい。また、建物の警備強化手段としてテレビ監視システム、侵入警戒装置、警報装置などが考えられます。

(4) 独立家屋と集合住宅の第3次防衛線の安全対策

第1次、第2次防衛線を突破され犯人に侵入される事態となった場合を想定し、一旦逃げ込む或いは警察などに救出の連絡をするための時間を稼ぐため、避難室を設置する必要があります。一般的に避難室には主寝室が適当と考えられます。

避難室の入口扉は、第2次防衛線の扉より丈夫なもの（鉄扉が望ましい）とし、扉の取り付け部分（四方周囲）には鉄棒を入れます。扉には、錠前、カンヌキを2個以上取り付け、覗き穴を設置します。避難室の窓全てには頑丈な鉄格子を設置し（鉄格子には内部より開閉できる部分を作っておきます）、極めて治安の悪い地域では窓の外側に鎧戸を取り付

けることが望ましいです。緊急時の脱出も考え、2階の場合には避難梯子なども用意しておきます。避難室の壁、天井、床は扉と同じ位強度を持ったものにします。どこか一部に弱い所があると、そこから避難室に侵入されます。

避難室内には電話（携帯電話或いは独立回線で、番号は必要最小限の知人を除いて教えてはならず、電話帳にも記載しないように注意）を設置し、緊急連絡先リストを備えておきます。電話以外に携帯無線機や強力な懐中電灯、外部に異常を知らせるビラ（高層住宅の場合有効）を常備したり、貴重品（旅券、金銭）を保管する場所を設置しておきましょう。その他に避難室内に常備しておく物として、①警備会社などに通報する緊急連絡装置、②サイレン付きハンドマイク、③警笛等、④蠟燭、⑤ライター・マッチ、⑥高性能ラジオ、⑦医薬品などが考えられます。

4. 車で移動するときの安全対策

(1) 車の購入

車を選ぶ時に、性能やスタイルよりも頑丈で馬力のあるものを選び、現地ではあまり見かけない、金持ちの象徴となるような「目立つ」もの（車種、色）は避け、故障があっても現地で修理や整備が容易にできるものにすべきです。車の装備は、サイドミラー（左右双方につける）、安全ベルトを必ず取り付け、防犯のため窓を開けなくてすむようにエアコンを取り付けます。バックミラーは一目で全体が見渡せるものとし、また運転手以外の者が後方を確認出来るバックミラーの設置も考えます。そうすれば、同乗者も車の後方を見ることができ、追跡車があるか否か確

認するときには効果的です。車には、故障した際の修理道具、スペアタイヤ、パンク応急修復資材、牽引ロープ、バッテリー用ケーブル、消火器、応急用医薬品などを常時積載しておきます。

更に、万一の場合に備え、車の盗難や事故など全てをカバーし、かつ、対人保険は滞在国の支払い額を十分にカバーできる保険に加入しておきます。危険度の高い地域では、窓が破られたり、ドアがこじあけられたりした時警報が鳴る装置を取り付けたり、自動車電話、小型無線機などの連絡手段を装備することを検討します。

また、会社で使用する業務用の車については、危険な地域においては自社の宣伝を車の側面などに入れると狙われる原因にもなりますので差し控えます。

(2) 日常の車の整備

車は定期的に点検し、異常があればすぐに整備して良好な状況にしておき、ガソリン、燃料は常時充分入れておきます。トランク内に予備の水、オイルなどを常備しておきます。駐車の際は管理の行き届いた駐車場を利用し、路上駐車は避けるべきです。例え短時間の駐車であってもドアは常にロックしておく習慣を付けることが大事です。また、「目立たない」ために、派手なステッカーなどを貼ることは避けましょう（逆に何らかの装飾を施した方が現地の車とみなされやすい場合は、同様の装飾をすることも考えられます）。貴重品や車の登録書類などは車内に放置してはいけません。

(3) 車での移動

車の乗降時と、駐車場から幹線道路に出る迄の間が最も危険で狙われ

やすいので、周囲に不審な人物はいないか注意し、少しでも異常を感じたら安全が確認されるまで乗り降りしないようにし、帰宅時も同様に周辺の安全を確認した上で駐車場に入れるようにします。

一般犯罪者やテロリストにとり、毎日同じ時間、同じルートを使用する者は、一番狙いやすい標的ですが。通勤、通学、買物、レクリエーションなどの時の行動がパターン化することを避け、経路や時間を変えるように常に心掛けます。ほんの少し行動パターンを変えるだけでも犯罪を防ぐ上では効果的です。

目的地での駐車は守衛などにより管理されている所を利用し、路上駐車は避けるべきです。

目的地迄の道路事情は前もって調査しておき、脇道や一方通行、人通りの少ない道は利用せず、できるだけ交通量の多い大通り、照明が十分な通りを通るようにします。道路では、他の車線からの攻撃から逃げられるよう、また信号待ちの際に歩道側から犯人に襲われないようできるだけ中央寄りを、なおかつ車線の多い道路では中央レーンを走ることを心掛けます。また、停車時に近付いてくる物売り、窓拭きなどにも注意を払うようにします。

緊急時に備え、目的地までのルートのどこに警察や病院などの施設があるか調べ、爆弾、襲撃などの対象となる可能性のある場所（例えば軍、政府関係機関など）も調査しておき事件に巻き込まれないよう注意します。

出発前には目的地までのルートを十分頭に入れておき、万一、計画ルートに支障が生じた場合の代替ルートをも計画しておくことは、安全に目的地へ到達するために大切なことです。

走行中は全てのドアをロックし、窓は閉めるか、またはわずかな隙間

だけ開けるようにします。走行中であっても外から見える位置に貴重品を置いてはいけません。追突事故や誘拐・襲撃などの危険性を考え、どのような事態が起きてもすぐに回避行動がとれるよう走行時、停車時を問わず車間距離を十分保つことが大事です。

運転手を雇用している場合、後部座席ばかりに座っていると主人であることがすぐに分かってしまうので、時には助手席に座ることも、犯人の目を逸らすには有効です。不審者に尾行されていると感じた時に躊躇なく臨機応変な行動をとるために、対応策を日頃から考えておきましょう。更に、不審者、不審車両の概要を記録しておけるような機器（録音装置など）を携行しておくこと、犯人特定の捜査や、今後の対応などに役立ちます。

走行中の周囲の状況確認は運転者だけに任せることなく、同乗者全員が注意を払う必要があります。一人より複数の人間の方が周囲の状況を的確に判断できます。また、いざというときに連絡できるよう、携帯電話等の通信機器を持つ必要があります。また連絡手段や連絡方法を複数想定し、習熟しておく必要があります。長距離を走る場合には、単独行動は避け、必ず複数の車で出かけるよう心掛け、夜間はなるべく一人で運転しないようにしましょう。また、天気予報などに注意し、雪などの気象状況の急激な変化にも備えて準備をしましょう。

(4) 運転手を雇用する場合

専属の運転手を雇う場合には、日頃から十分な安全運転教育（必要ならばディフェンシブ・ドライビングの受講）を行うと共に、運転手自身がガードマンであるとの自覚を持たせるようにしましょう。運転手には常に車の側にいることを命じ、非常時の合図を決めておきます。

5. 生活面の安全対策

(1) 引越後

自宅周囲の環境、一方通行などの道路事情、地形に馴れることが大事です。緊急時に備え警察、病院、消防機関などの位置や連絡方法・利用方法、また、併せて最寄りの知人宅の位置、連絡方法なども確認しておきます。

日常の行動は現地の習慣や価値観に考慮し、派手な生活や現地の人々の反感を買うような行動は慎み、できるだけ周囲の住民に溶け込むよう努力します。特に隣人とは仲良くし、家族ぐるみで付き合えるような良好な人間関係を保つように努力することが重要です。日本では新しい住居に移り住む時、ちょっとした手土産を持参し近所に挨拶して回りますが、海外においてはその限りではありません。しかし、相手が外国人であっても挨拶に来たことに対して気分を害するようなことは少なく、近所との良好な関係を築くため地域の習慣に応じて、管理人など先方が信頼している人と一緒に、事前の約束をして挨拶に行ってみることも効果的かもしれません。

入居後は安全対策の面から自宅を再度点検し、弱点があればその弱点を補うべく検討することが大切です。近所がどのような安全対策をとっているかを調べ参考とします。近所に泥棒が侵入したなどの事件発生の情報や安全に関する話は、地域の特性に応じた思わぬ対策・教訓が含まれていることが多いので、常日頃から機会ある毎に隣人と会話を交わし、情報収集に努めることが大切です。

(2) 訪問者に対する注意

訪問者があってもすぐには扉を開けず、覗き窓やインターフォンで訪問者の身元を確認することが重要です。不審な同伴者はいないか、付近に不審者はいないか良く確認して下さい。また、身元を確認した後も、扉を開ける時には安全チェーンをかけたまま細目に開け、再度確認をしてから扉を開けるよう心掛けましょう。訪問者がたとえ親しい知人であっても、見知らぬ人が一緒の時や非常識な時刻の訪問の時には十分な注意が必要です。

予期せぬ品物が届けられてきた時は、その品物を扉の外に置くよう言い、送り状への受取サインは扉の下からやり取りし、配達人が立ち去り周囲の様子を確かめてから扉を開けるようにします。

物売りや電話、水道、電気、ガスなどの工事人などは、不用意に住居の敷地内に入れてはいけません。頼みもしない工事人が来た場合には、インターフォンなどで用件、事務所の名前と電話番号を聞き、覗き窓から身分証明書などによる確認を行い、更に事務所に電話で確認をするくらいの用心が必要です。

(3) 使用人に対する注意

使用人は家族と1日のうち長い時間に過ごし、家族に関する多くの情報に接する立場にあります。従って信頼できる使用人を雇用できるか否かは外国で安全に生活を送るための重要な鍵となります。使用人を雇う際には、まずは身元調査を行います。一般公募によらず、信頼できる人から紹介を受けるのが一番です。そして可能な範囲内で、使用人の経歴、家庭環境、財産状況などの情報を得ておくことも重要です。また、公的機関が発行した身分証明書などの写しを入手する必要があります。

使用人には、家族同様しっかりした安全対策の心得を教え、教育することが必要です。来訪者に対する警戒、電話応対時の注意、特に家人が不在の場合の外部からの問い合わせに対する応対要領などを徹底的に教えておきます。使用人が不用心ではいくら警備対策を実施してもまったく意味がなくなります。

使用人に対し、家人不在時の緊急連絡先を覚えておくことは必要ですが、行動予定を伝える必要はありません。

また、使用人に隙を見せてはいけません。貴重品や現金を不用意に放置しておくことは、つい出来心で盗みを働かせてしまう結果となる可能性もあります。また、プライドを傷つけたり、恨みを買うような言動や行為をしてはいけません。

日本人の場合、外国で初めて使用人を雇うことが多く、不慣れなこともあり、管理や指導が極めて甘くなったり、逆に厳しすぎて恨みを買ったりする場合があります。現地事情に詳しい知人宅での例を参考にすると役立ちます。

使用人が犯罪の手引をしたり、犯人に利用されたりする場合がありますので常日頃から使用人の言動、態度、外出、休日の行動、心情の変化などに対する注意を怠らないようにします。

使用人が複数の場合、統制をとるべく責任者を指定しましょう。また、使用人を解雇する場合などは、現地の習慣に応じた手当を支給したり、或いは、その後の職探しのために紹介状を書くなどの配慮も必要かもしれません。

(4) 家族の協力、家族の注意

まずは家族の安全は家族全員が一致協力して守るとの心掛けが必要で

す。その為にも家族に対しても安全に関する教育を徹底しておきます。最近起きた事件の概要や教訓事項などを機会ある毎に、配偶者もちろん子供にも話し十分注意します。家族一人一人が住宅に異常を発見した時の行動を知っていなければならず、また、自宅の電話や無線機等非常時の連絡手段やその在り場所、使用方法を知っておくことが大事です。

家族の日程、習慣、旅行の計画、その他の家族の行動についての計画をむやみに人に話さないようにします。

子供の安全については、当然のことながら日本にいるとき以上に注意を払います。幼児の場合は、遊ぶ時は親が常に側にいるようにします。親が自ら、通学路を歩き安全であるか否かを点検し、もし必要とあらば、学校への送迎は親自らが責任を持って行い、使用人などに任せてはいけません。

緊急事態や事件はいつ起こるか分かりません。家族全員の行動、居場所を常に把握し、いざという時にはお互いが直ちに連絡をとり合えるようにしておきます。各人の予定の行動や計画が変わった場合には連絡をとりあっておくようにすることも大事です。

(5) 外出の時の注意

休日の度に、同じ時間に同じゴルフ場に出かけるとか、同じレストランを利用するなどの、場所や時間の決まった外出は狙われる危険がありますので、パターンの決まった外出は避け、ときどき場所や時間を変えて下さい。

外出前に使用人などに外部から問い合わせがあった場合の返事の仕方、注意事項（居場所、帰宅予定時間を教えない）などについて指導をしておきます。

外出するときは覗き窓などから周囲の状況、安全を確認してから扉を開け、戸締まり、施錠漏れ、火の不始末がないか今一度確認してから出かけるよう習慣付けます。帰宅時も外出時と同様に、自宅の周囲に不審者が潜んでいないかどうか良く確認し、安全を確かめてから自宅に入るよう注意が必要です。

外出先での社交活動などでは、例えば、現地の人の悪口、民族・種族的問題、宗教や文化、習慣などについて、現地の人の反発を買うような発言を行うことは目立つことになり攻撃の対象となる可能性があります危険です。特に飲酒などに厳しい国では、日本のように「羽目を外す」ことは、周囲の人間に不快感を与えますので当然差し控えるべきですし、肌を露出するような服装にも十分注意が必要です。

また、日本における商習慣に応じて初対面の人に名刺を配ることは、不用心になることもありますし、名刺には自宅の電話番号は印刷せずに、必要な場合のみに手書きで加えるようにします。

(6) 電話及び通信手段

電話器は主寝室（避難場所）と居間など少なくとも2ヵ所以上に設置することが望ましく、更に可能な限り携帯電話、衛星電話、衛星携帯電話あるいは状況により携帯無線機等複数の通信回線を設置すると良いでしょう。同じ回線の電話（例えば親子電話）だと、一つの電話回線が切断されるともう一つはいざというとき使用できません。電話器の側にはメモ帳と筆記具、緊急連絡先リスト（大使館・総領事館、警察、消防署、病院など）を常に置いておき、持ち出せるようにしておきます。必要ならば録音装置の設置も考えます。また、助けを呼ぶために最小限必要な現地の言葉を日頃から修得し、電話器の側に書き留めておくことも必要

です（また同じように「単語帳」は常に身につけておくと良いでしょう）。

自宅の電話番号、住所などは、電話帳に載せるようなことはせず（電話を架設すると自動的に電話帳に載せられてしまう国もあるので注意して下さい）、限られた人にしか電話番号を教えないように注意します。

日本の習慣でつい電話をとる時に、こちらから名乗ってしまいますが、犯人が探りを入れるための電話である可能性もあるので、相手が名乗るまではこちらから名乗るのは避けるべきです。「間違い電話」に対して不用意にこちらの電話を教えたりすることは、相手に情報を与えることになり危険です。少しでも不審な感じを受けたら、番号違いと言って電話を切ります。

家族や使用人には相手が確かでない限り、こちらのスケジュールなどを教えないように指導し、電話の内容が不明確な場合には、例えば「今、手が放せないので主人が後で直接電話する」と言って相手の電話番号を聞き、これを主人に伝えるといった電話応対時の注意事項を伝えておきましょう。

万一脅迫電話がかかってきた場合、落ち着いて対処し、メモなどに相手の特徴を書き取るなどし、すぐに必要な所に連絡がとれるよう緊急時の処置を各人が知っておく必要があります。

使用人が勝手に私用で電話をかけていないか、不審な電話を受けていないかに注意する必要があります。

(7) 鍵

鍵は警備対策上の基本であり、その取り扱いには細心の注意を払います。住居の鍵は勿論、勤務先の鍵、車の鍵についても厳重な注意が必要です。

鍵は常時携帯し、自宅内でも机の上や誰もが見つけやすい場所に掛けておくようなことはせず、鍵のかかる場所（金庫等）に保管しておくことが望ましいです。鍵には脱落を防ぐため鎖や紐を付けると良いです。鍵は、本人と家族のみが持ち、使用人などには貸与すべきではありません。前の居住者がスペアキーを持っていることもありますので、入居する時は重要な鍵は全て新しいものに交換する必要があります。鍵を紛失した時は、必ず錠前を交換しなければいけません。錠前の取り付けや予備錠の作製は、信頼できる業者だけに委託することが大事です。

(8) 休暇などの際の措置と対策

長期間不在とする場合、特に独立家屋はその間全くの無防備となります。例えば犯人が侵入したとしても生命の危険はありませんが、家財を盗まれた場合その補充や輸入の困難な国においては一大事です。このための措置としては次の事項が考えられます。

まず、住居用安全システムとして、住居内に取り付けられたセンサーなどにより何らかの異常を検知した際、警備会社の中央コントロールセンターに通報され、直ちに警備会社から保安要員が駆け付けるといったシステムが考えられます。地域によってはこのようなシステムに近いサービスを提供する会社もありますので信頼できる警備会社のサービスを利用できれば良い対策となります。

次に、不在の間信頼できるガードマンを雇用することも有効ですが、この場合、ガードマンは、日頃から雇用している者に限られ、不在の間だけに限り雇用することは好ましくありません。

使用人などを不在の間住居に住ませるのは、使用人がよほど信頼できる場合のみとすべきでしょう。

住居の鍵を信頼できる知人に預け、時々住居の状況を点検してもらったり、ゴミを出してもらったり、カーテンを開けてもらったりすることは、家人が留守であることを確認できないようにする上で効果があります。自動タイマーや感光式スイッチで住居内外の照明が作動したり、TVやラジオなどが作動するようにしておくことも同様の効果が得られます。